Nara Women's University

老人福祉施設で生活する高齢者の社会交流と生活圏域に関する研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 齋藤功子 公開日: 2012-05-25 キーワード (Ja): 家族, 高齢化社会, 高齢者, 社会, 生活圏, 老人福祉施設 キーワード (En): 作成者: 齋藤,功子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/3042

第３章　養護老人ホーム入所者の施設内外の交流と外出行動

３－１　はじめに

養護老人ホーム（以下，養護と略す）は，特別養護老人ホーム（以下，特養と略す）や軽費老人ホーム（以下，軽費と略す）と同様に老人福祉法に規定される老人福祉施設のひとつであり，身体状況の点で特養は重度，軽費は軽度の介護を必要とする高齢者が対象であるのに対し，養護は中度の者を対象としている。また，入所要件に経済的条件，具体的にはその高齢者の属する世帯が被保護世帯か市町村民税の所得割を課されていないという要件を必要とする措置施設であり，身体的，精神的状態を問われる特養や，施設と個人との契約に基づき入所する軽費とは異なる側面がある。

養護入所者を対象の関連既往研究として，児玉の一連の研究[1) 2) 3)]では，施設の建築条件が入所者の心理面に与える影響を中心に考察し，入所者の環境適応と建築計画との関係を検討している。また，養護入所者の外出行動に関しては，外出圏域と外出頻度を考察した研究[4)]，養護入所者を含む歩行障害老人の外出行動に関する研究[5)]等があるが，本章では入所者の社会交流の活性化という問題関心から，養護入所者の施設内外の交流と外出行動をあわせて実態把握し，その規定要因を考察することを目的とするところに相違がある。

３－２　研究方法

養護には視覚障害者専用養護と一般養護の２種がある。視覚障害者専用養護はほぼ都道府県毎に１施設の割合で設置されており，全国で47施設であるが（未設置県は山形・富山・岐阜・滋賀・鳥取・沖縄の各県），本章の研究対象施設としては，施設数が僅少である視覚障害者専用養護は対象とせず，全国に900施設が設置されている一般養護を取り上げることとする。

養護入所者の社会交流と生活圏域に関し，施設内交流，施設外交流および外出行動の側

面より，入所者を対象としたアンケート調査（面接聞き取り調査）により実態を把握するものとする。

アンケートの設問構成は，性，年齢等の属性の他，入所期間，身体状況，主観的健康感，前住地，施設内外交流および外出行動に関する項目である。施設内交流については施設行事・クラブ活動への参加，施設内友人数および友人とのつきあいの程度を施設内交流を測る指標とした。施設外交流については施設外サークルへの参加の有無，施設外の友人数および友人とのつきあいの程度を，外出行動については，外出目的別にその頻度と外出手段（交通機関等）をそれぞれの指標と捉えた。

調査対象施設の設定に際しては，施設の立地条件による分析を可能とするため，人口規模の異なる市町村から対象施設を設定し，4施設を対象とした。調査対象者は，入院中や面接聞き取り調査不可能な入所者を除く全入所者であり，調査総数は208人（4施設の定員総数の64%）である。調査期間は，1996年5月～7月。

３－３　調査対象施設の概要

調査対象施設の概要および施設の主要階の平面図を表3-1，図3-1にまとめた。

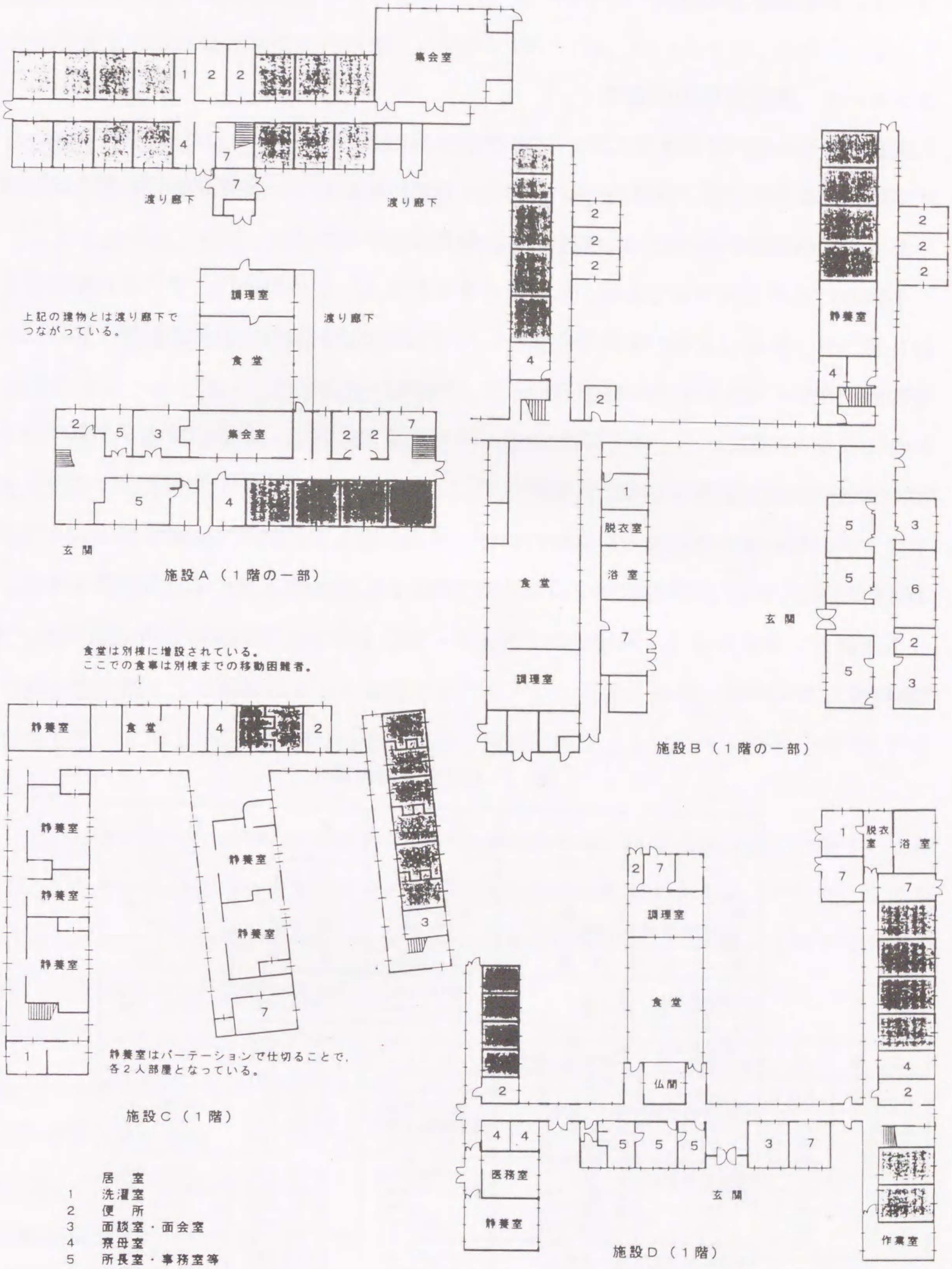
各施設の開設時期は，1946年（昭和21年）から1952年（昭和27年）に至っている。居室は２人部屋であり[6]，便所・洗面所は共用である。各施設の建物はすべて２階建であり，1施設にはエレベーターが設置されている（施設Ｂ）。設置主体は3施設が社会福祉法人，1施設が公立である。

また，各施設の立地する市町村の人口規模から市部2施設，郡部2施設に分類することができる。

表3-1　調査対象施設の概要

	施設Ａ	施設Ｂ	施設Ｃ	施設Ｄ
データ数	５５人	５６人	５９人	３８人
所在地 人口	滋賀県 大津市 約23.4万	滋賀県 蒲生郡 約1.2万	京都府 京都市 約147.9万	滋賀県 高島郡 約1.3万
設置形態 （開設時期）	社福法人 (1946)	公立 (1949)	社福法人 (1952)	社福法人 (1952)
定員	１０５人	８０人	９０人	５０人
併設施設	－	－	特養	－
階数	２階建	２階建	２階建	２階建
居室面積	9.43㎡	8.61㎡	6.43㎡	6.90㎡
立地条件	市部	郡部	市部	郡部

〈注記〉 居室面積は，入所者１人当りの面積で算出した。



1　居室
2　洗濯室
3　便所
4　面談室・面会室
5　寮母室
6　所長室・事務室等
7　会議室
　　倉庫・物入れ等

図3-1　各施設の平面図（主要階）

３－４　調査対象者の概要

３－４－１　調査対象者の属性

調査対象者の属性を表3-2にまとめた。性別では女性が78.8%を占める。

平均年齢は男性77才，女性79.7才であり，最高年齢は97才，後期高齢者の割合は73.6%である。入所期間の平均は 6.3年であり，最長は28年である。

子供のいる者は46.6%である。入所者と身元引受人[7]との続柄は，子（子の配偶者を含む）36.6%，兄弟（兄弟の配偶者を含む）32.2%がほぼ同じ割合であり，甥・姪15.6%，その他（身元引受人のいない者を含む）15.6%と続く。

身元引受人に関し，子供のいる者は46.6%であるのに対し，身元引受人が子供である者は36.6%であり，子供がいるにも関わらず，子供以外の者が身元引受人となったり，身元引受人がいない者が存在する。女性の場合，身元引受人を子供とする割合がもっとも高いのに対し（39.9%），男性の場合は23.8%であり，その差が大きいことに特徴がある。

入所直前の家族形態は，独居が71.4%と高い割合を示し，子供世帯との同居は 8.7%に過ぎない。

表3-2　調査対象者の属性

		男　性	女　性	合　計
デ　ー　タ　数		４４人 (21.2%)	１６４人 (78.8%)	２０８人 (100%)
平　均　年　齢 （後期高齢者の占有率）		７７．０才 (65.9%)	７９．７才 (75.6%)	７９．１才 (73.6%)
平均入所期間		６．２年	６．３年	６．３年
子供の有無	あ　り な　し	20(47.6%) 22(52.4%)	75(46.3%) 87(53.7%)	95(46.6%) 109(53.4%)
入所直前の家族形態	独　居 子供世帯と同居 その他	29(69.0%) 2(4.8%) 11(26.2%)	118(72.0%) 16(9.8%) 30(18.2%)	147(71.4%) 18(8.7%) 41(19.9%)
本人の前住地	同一市町村 同一府県 他府県	23(53.5%) 16(32.6%) 6(14.0%)	89(54.6%) 64(39.3%) 10(6.1%)	112(54.3%) 78(37.9%) 16(7.8%)
身元引受人の続柄	子　供 兄　弟 甥・姪 その他	10(23.8%) 12(28.6%) 6(14.3%) 14(33.3%)	65(39.9%) 54(33.1%) 26(16.0%) 18(11.0%)	75(36.6%) 66(32.2%) 32(15.6%) 32(15.6%)
身元引受人の現住地	同一市町村 同一府県 他府県	13(29.5%) 10(22.7%) 21(47.7%)	64(39.0%) 49(29.9%) 51(31.1%)	77(37.0%) 59(28.4%) 72(34.6%)
入所前の住宅所有形態	持ち家 公営借家 民営借家 その他	11(26.8%) 0(　－　) 12(29.3%) 18(43.9%)	59(39.1%) 9(6.0%) 47(31.1%) 36(23.8%)	70(36.5%) 9(4.7%) 59(30.7%) 54(28.1%)

〈注記〉上表は不明件数を除いて表示した。以下の図表も同様である。
身元引受人欄の続柄には，続柄人の配偶者の場合を含む。

施設の所在地と入所者の前住地との関係では，92.2%が同一府県からの入所である。

身元引受人の現住地と施設の所在地との関係においては，65.4%が同一府県内に居住する。

入所前の住宅形態は，持ち家が36.5%，民営借家30.7%，公営借家 4.7%，その他（寮，住み込み，間借り等）28.1%である。性別に比べると，女性は持ち家の者の割合が39.1%ともっとも高いが，男性では43.9%の者がその他に分類されることが特徴的である。

３－４－２　調査対象者の身体状況等

身体状況については，視力・聴力・階段昇降に関し把握することとし，〈普通〉〈不自由〉に分類した。不自由については，視力で「眼鏡をかけてもあまり見えない」「ほとんど見えない」，聴力で「補聴器が必要」「ほとんど聞こえない」，階段の昇降で「介助が必要」「まったく昇降できない」のいずれかに該当する者とした。

いずれの項目においても，女性は男性に比べ不自由である者の割合は高く，階段昇降に関し女性の46.0%が不自由に分類される。

精神状態に関しては施設職員から掌握することとし，正常，痴呆，精神遅滞，精神障害に分類した。正常と分類した者は71%，痴呆，精神障害がともに12%，精神遅滞は4.3%である。

以上の項目に加え，老研式活動能力指標[8]の手段的自立（以下，ＩＡＤＬと略す）を補足することで，高齢者の日常生活動作の水準をより適切に把握できるようにした。ＩＡＤＬに関する４項目[9]の内，すべて「できる」と回答した者を高レベル群，１項目でも「できない」と回答した者を低レベル群と分類することとした。高レベル群と低レベル群の割合はほぼ同率であるが，性別にみた場合，女性の方が男性に比べ低レベル群の割合が高い。

主観的健康感については，よくないと答えた者が42.4%ともっとも多い。

表3-3　身体状況等

		男　性	女　性	合　計
データ数		４４人	１６４人	２０８人
身体状況	視　力	4.7%	10.4%	9.2%
	聴　力	9.3%	11.6%	11.1%
	階段昇降	30.2%	46.0%	42.7%
精神状態	痴　呆	9.3%	12.8%	12.1%
	精神遅滞	9.3%	3.0%	4.3%
	精神障害	11.6%	12.8%	12.6%
	正常の範囲	69.7%	71.3%	71.0%
ＩＡＤＬ	高レベル群	65.9%	48.2%	51.9%
	低レベル群	34.1%	51.8%	48.1%
主観的健康感	よ　い	29.5%	23.0%	24.4%
	普　通	29.5%	34.2%	33.2%
	よくない	40.9%	42.9%	42.4%

〈注記〉身体状況欄はそれぞれ不自由な者の割合を示した。

３－５　施設内交流の実態と規定要因

施設内交流を施設行事，クラブ活動への参加，施設内友人数および施設内友人とのつきあいの程度の側面より捉えた。

行事への参加では，過半数を越える56.7%が「ほとんど参加している」と答えているが，クラブ参加率は45.4%で過半数に満たない。施設内の友人数では3人以上いる者が45.5%を占めるが，友人なしという者も44.4%あり，その差はあまりない（図3-2）。

つぎに，性別・年齢・入所期間・身体状況・精神状態・ＩＡＤＬ・主観的健康感の別にクロス集計し検定を行なった（図3-3）。

分析の結果，性別では女性は男性に比べ，施設行事・クラブ活動への参加や友人の有無に関し施設内交流が高いことが分かる。女性のクラブ参加率は49.7%であるのに対し，男性では29.5%であり，性別で有意差がみられる。

年齢別では，加齢とともに交流の程度が低下する傾向が伺えるが有意差はみられない。

入所期間では，入所１年未満と10年以上で交流の程度が低い傾向がみられるが有意差はみられない。

身体状況別では，階段昇降の普通・不自由により，行事参加・クラブ参加，施設内の友人の有無の項目すべてに関し有意差がみられるが，視力・聴力に関しては有意差はみられない。

ＩＡＤＬのレベル別でみた場合，行事参加・クラブ参加，施設内友人の有無の項目すべてに有意差がみられ，高レベル群の活動は低レベル群に比して活発である。身体状況の内，身体移動を伴う階段昇降において，施設内交流のすべてに有意差がみられたのと同様に，高齢者の日常生活動作の水準を手段的自立の側面より把握するＩＡＤＬのレベル別におい

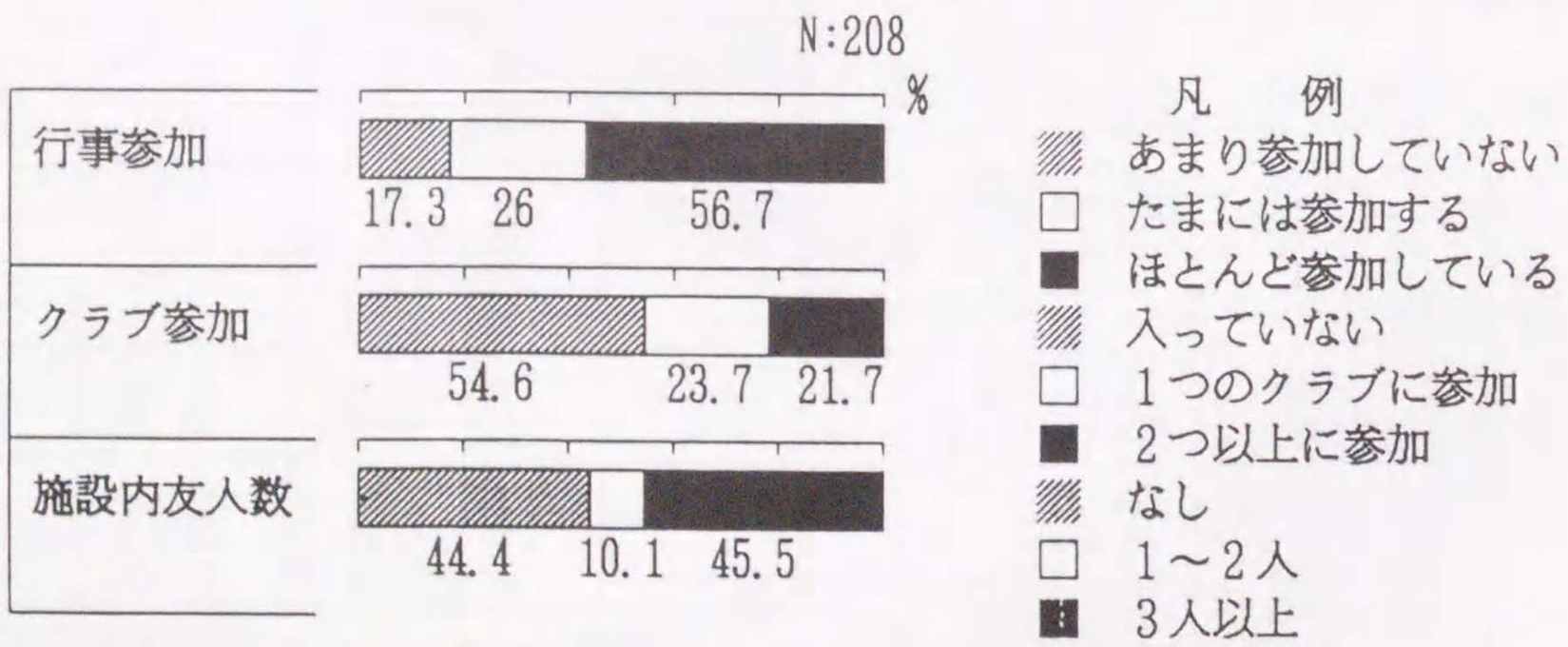
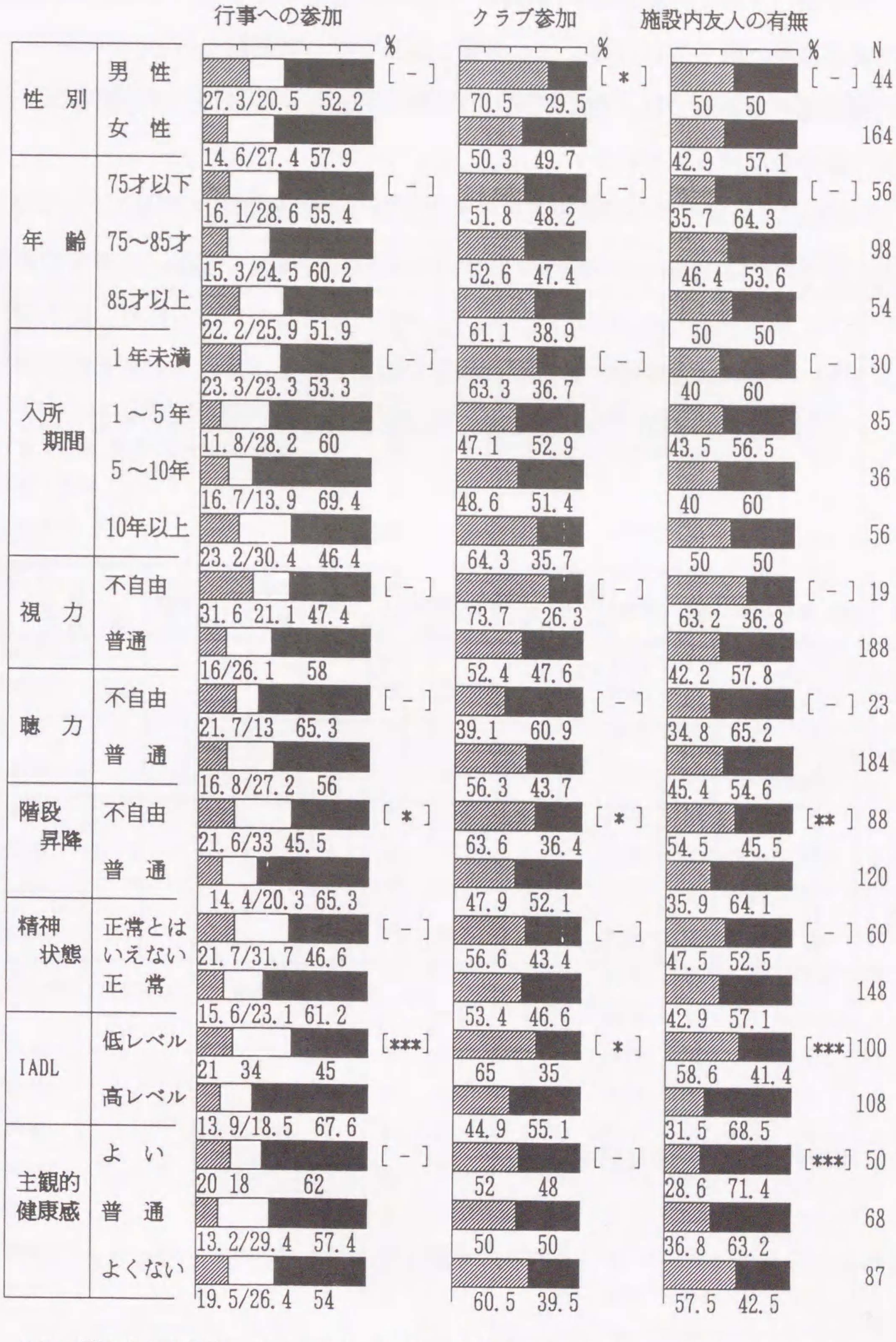


図3-2　施設内交流ー行事・クラブ・友人数ー



凡例：▨あまり参加□たまには■ほとんど　▨参加　■不参加　▨なし　■あり
していない　参加する　参加している

検定結果を[ ]内に示した。＊印は次の意味を表し，以下の図表においても同様である。
***：p＜0.001　**：p＜0.01　＊：p＜0.05

図3-3　性別・年齢等からみた施設内交流ー行事・クラブ・友人の有無ー

施設内交流の程度にはＩＡＤＬのレベルが強く関わることが理解できる。

主観的健康感の項目別では，施設内友人の有無に有意差がみられ，健康感をよくないと答えた者の過半数には友人がいない。

表3-4に各施設の設置クラブの状況をまとめた。クラブ設置数と入所者のクラブ参加率には関連がみられ，３種類のクラブしか設置されていない施設Ｃでは，入所者の参加率は33.9%であり，他の施設の参加率が48.1%～52.6%に分布しているのに対し低水準の状況にある。また，全体に設置クラブの内容は，どちらかといえば女性を対象とした内容のものが多く，このことも性別のクラブ参加率の相違に影響しているものと考えられる。

表3-4　設置クラブの状況

施設	歌	民謡	器楽	絵	粘土	習字	華道・生花	茶道・お茶	手芸	園芸	短歌・俳句	詩吟	囲碁・将棋	ゲートボール	体操関係等	その他	クラブ数の合計	参加人数（参加率）
A	○ カラオケ	○	○ 大正琴			○	○	○			○			○		○ 写経	9	26 (48.1%)
B	○	○	○ 大正琴				○		○	○		○		○			8	28 (50.0%)
C	○ カラオケ						○		○								3	20 (33.9%)
D	○						○	○	○	○				○			6	20 (52.6%)

［注記］　参加人数欄の下段は調査サンプル数で除した参加率。

３－６　施設外交流の実態と規定要因

施設外交流を施設外サークルへの参加，施設外友人の有無，友人とのつきあいの程度の側面より捉えた。

施設外サークルへの参加者実数は25人（調査対象者の12.0%）と少数であり，クロス集計による分析および検定の結果，どの項目にも有意差はみられない。施設外サークル参加者のプロフイールを表3-5にまとめた。サークル内容は，宗教活動が20人と突出して多く，趣味活動（3人），老人クラブ（2人）と続く（複数のサークルに参加の場合を含む）。性

別での参加者

参加する者の

NO.	サ
161	老人クラブ
191	老人クラブ
189	趣味(文集)
186	老人の家,
169	老人大学
143	趣味(カラ
159	宗教
160	宗教
167	宗教
172	宗教
177	宗教
196	宗教
203	宗教
3	宗教
32	宗教
43	宗教
59	宗教
67	宗教
76	宗教
96	宗教
98	宗教
105	宗教
111	宗教
123	宗教
149	宗教

別では女性の参加者は22人であるのに対し，男性の参加者は3人である。施設の立地条件別での参加者数では，市部19人（2施設），郡部6人（2施設）であり，施設外サークルに参加する者の中では市部に立地する施設での参加者が多い。ここで，宗教活動以外の参加

表3-5　施設外サークル参加者のプロフィール

NO.	サークル内容	施設	性別	年齢	入所期間	前住地	身体状況	施設外友人数	つきあいの程度
161	老人クラブ	A	女	85才	3.0年	同町内	高レベル	30人	3
191	老人クラブ	A	女	78才	3.0年	同町内	高レベル	17人	1, 2, 3
189	趣味(文集), その他(身障者の会)	A	女	68才	3.2年	同町内	高レベル	150人	1, 2, 3, 4
186	老人の家, 趣味(コーラス), 宗教	A	女	91才	0.3年	同町内	低レベル	10人	3
169	老人大学	A	女	78才	9.9年	同市	高レベル	1人	2
143	趣味(カラオケ)	D	女	73才	12.0年	同町内	低レベル	0人	—
159	宗教	A	女	83才	2.0年	同市	低レベル	3人	1, 2, 3
160	宗教	A	女	79才	18.0年	同町内	低レベル	0人	—
167	宗教	A	女	76才	2.0年	同市	高レベル	10人	1, 2, 3
172	宗教	A	女	79才	11.0年	同市	高レベル	0人	—
177	宗教	A	女	80才	1.0年	同市	低レベル	3人	3
196	宗教	A	女	78才	2.1年	同市	低レベル	3人	2, 3
203	宗教	A	女	88才	9.0年	同県	低レベル	1人	1
3	宗教	B	女	83才	4.8年	同県	低レベル	30人	3, 5
32	宗教	B	女	77才	2.1年	同県	高レベル	20人	1, 3, 4
43	宗教	B	男	64才	0.2年	他県	低レベル	0人	—
59	宗教	C	女	77才	12.0年	同市	高レベル	4人	3
67	宗教	C	男	81才	14.0年	同市	低レベル	5人	1
76	宗教	C	女	90才	16.0年	同市	高レベル	5人	1
96	宗教	C	女	85才	2.5年	同市	高レベル	3人	3
98	宗教	C	女	84才	4.0年	同市	高レベル	10人	1, 3
105	宗教	C	女	87才	18.0年	同市	低レベル	6人	3
111	宗教	C	女	85才	4.5年	同市	高レベル	3人	2
123	宗教	D	男	84才	2.5年	同県	低レベル	10人	1
149	宗教	D	女	66才	3.0年	他県	高レベル	0人	—

〈注記〉　ＮＯ．はデータ処理用のものである。
「つきあいの程度」の数字は次による。
１→年賀状のやりとりをする　２→手紙や電話で近況等を話す
３→たまに出会ったり，一緒に外出したりする　４→部屋や家を訪ねあう
５→悩みをうち明けたり，相談する

者6人をみてみると，全員が女性であり，6人中5人が施設Ａである。前住地との関係では，6人全員が同一市町村からの入所者であり，内5人は入所施設と同じ町内からの入所者であるという特徴がある。この5人は，入所以前から参加していた老人クラブやサークルに継続して参加しているもので，施設と前住地との距離関係が社会活動の継続性に強く関わることを示唆しているといえる。

つぎに，施設外の友人との交流状況に関し，友人の有無および友人とのつきあいの程度を把握した。友人とのつきあいの程度は，「年賀状のやりとりをする」「手紙のやりとりや電話で近況等を話す」「たまに出会ったり，一緒に外出したりする」「部屋や家を訪ねあう」「悩みを打ち明けたり，相談したりする」の５項目について尋ねた。分析に際しては，年賀状のやりとりをする程度のつきあいか，それ以上のつきあいがあるか，および友人の有無も含め３カテゴリーで整理した。分析結果を図3-4に示した。

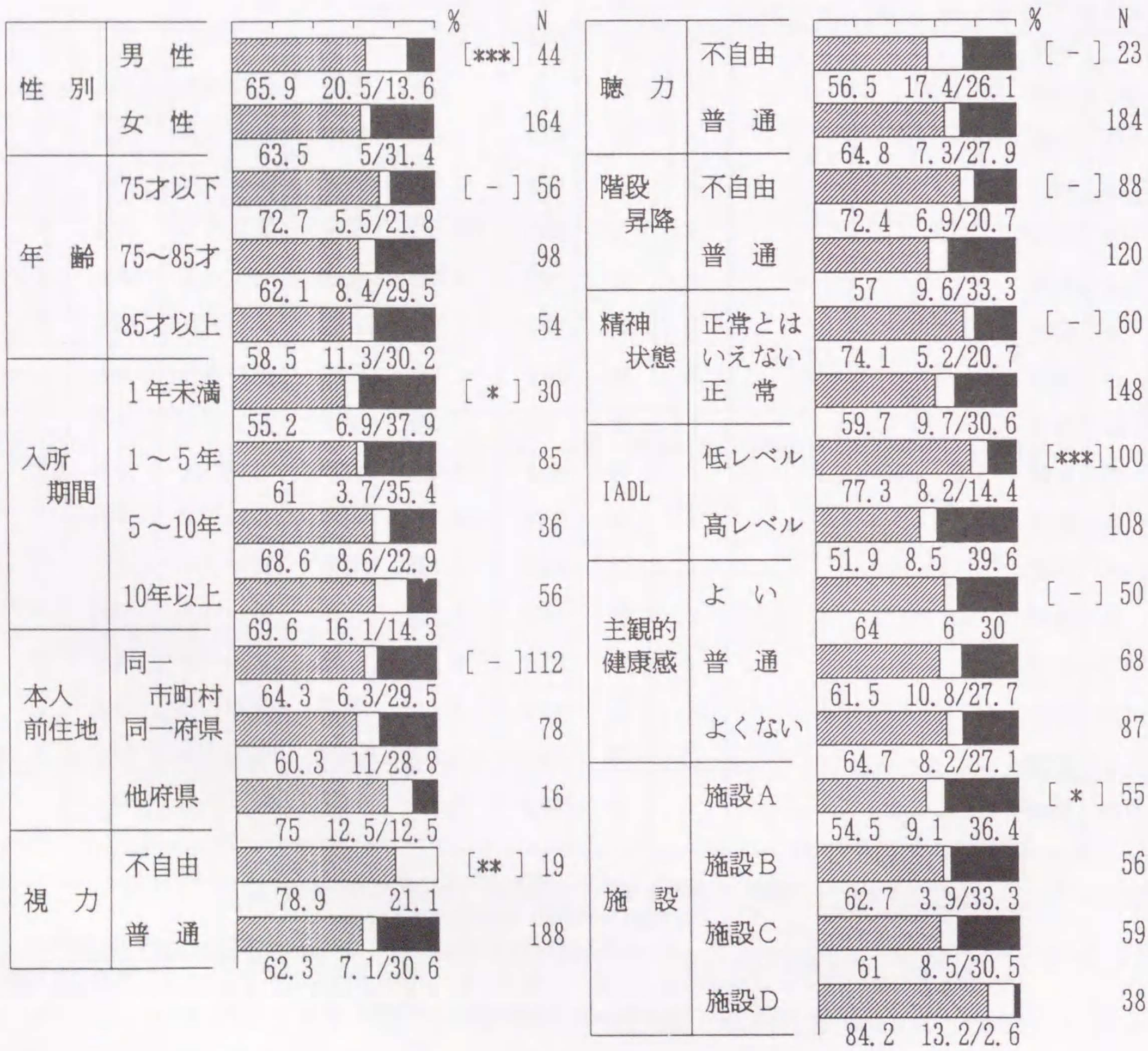


図3-4　施設外友人の有無とつきあいの程度

施設外友人の有無とつきあいの程度に関し，有意差が認められる項目は，性別，入所期間，視力，ＩＡＤＬおよび施設である。

性別でみると，施設外友人の有無は男女ともほぼ同率であるが，つきあいの程度では女性は男性に比べ，年賀状のやりとり以上のつきあいのある友人がいる者の割合が高い。

入所期間別では，入所期間の長期化に伴い，友人の有無，つきあいともに希薄になる傾向がみられる。

身体状況の内，視力不自由な者では年賀状のやりとり以上の友人が皆無であることが特徴的である。ＩＡＤＬでは，高レベル群においては39.6%が年賀状のやりとり以上のつきあいがあるのに対し，低レベル群では14.4%にすぎない。

施設別において，施設Ａ・施設Ｂ・施設Ｃでは年賀状のやりとり以上の友人がいると答えた者が30.5%～36.4%に分布するが，施設Ｄでは2.6%に過ぎず，84.2%の者は施設外の友人はいないと答えている。

３－７　施設内外交流の規定要因

これまでの施設内外交流の分析から性別・ＩＡＤＬなどが交流程度に関わることが理解できた。そこで，これらのどの要因が施設内外の交流にどの程度関わっているかを考察するため数量化Ⅱ類による分析を行うこととする。目的変数は行事参加の有無，クラブ参加の有無，施設内友人の有無および施設外友人の有無とし，説明変数としては，性別，入所期間，ＩＡＤＬ，主観的健康観，施設の５項目を用い，施設外友人の有無に関しては本人前住地を加えた６項目を設定した。分析結果を表3-6に示す。

レンジ，偏相関係数とも数値が大きいほど目的変数への影響が大きいことを示している。施設行事への参加では，レンジ，偏相関係数ともに行事参加を規定する第一の要因はＩＡＤＬであり，ついで施設が関わることを示している。クラブ参加は，第一にＩＡＤＬが，ついで性別，施設が参加の有無を規定している。施設内友人は，ＩＡＤＬおよび主観的健康観が友人の有無を規定する要因である。施設外友人については，レンジ，偏相関係数で順位は多少異なるがＩＡＤＬと施設が規定要因であることが判明した。

表3-6　施設内外交流の数量化Ⅱ類による計算結果

カテゴリー		行事				クラブ参加			
		N	カテゴリースコア	レンジ	偏相関係数	N	カテゴリースコア	レンジ	偏相関係数
性別	男性	43	−0.082	0.1043	0.0887	43	−0.161	0.2038	0.1714
	女性	161	0.022			160	0.043		
入所期間	１年未満	30	−0.047	0.2179	0.1550	30	−0.065	0.1363	0.1326
	１～５年	83	0.014			83	0.056		
	５～１０年	36	0.134			35	0.047		
	１０年以上	55	−0.084			55	−0.080		
ＩＡＤＬ	高レベル群	108	0.103	0.2182	0.2195	107	0.103	0.2179	0.2195
	低レベル群	96	−0.116			96	−0.115		
主観的健康観	よくない	87	−0.019	0.0377	0.0347	86	−0.046	0.0850	0.0833
	普通	67	0.011			67	0.039		
	よい	50	0.019			50	0.028		
施設	施設Ａ	54	0.063	0.2076	0.1823	53	0.029	0.2083	0.1509
	施設Ｂ	55	−0.144			55	0.002		
	施設Ｃ	58	0.044			58	−0.098		
	施設Ｄ	37	0.053			37	0.110		
		判別的中率 64.2%，相関比 0.3212				判別的中率 62.6%，相関比 0.3467			

カテゴリー		施設内友人				施設外友人			
		N	カテゴリースコア	レンジ	偏相関係数	N	カテゴリースコア	レンジ	偏相関係数
性別	男性	43	−0.098	0.1240	0.1066	43	−0.028	0.0362	0.0320
	女性	160	0.026			160	0.008		
入所期間	１年未満	30	0.015	0.0557	0.0454	30	0.060	0.1061	0.0767
	１～５年	83	−0.013			82	0.018		
	５～１０年	35	0.041			36	−0.046		
	１０年以上	55	−0.015			55	−0.030		
ＩＡＤＬ	高レベル群	108	0.106	0.2259	0.2284	108	0.111	0.2380	0.2436
	低レベル群	95	−0.120			95	−0.127		
主観的健康観	よくない	87	−0.118	0.2415	0.2146	86	0.030	0.1026	0.0889
	普通	67	0.063			67	0.016		
	よい	49	0.124			50	−0.073		
本人前住地	同一市町村					110	−0.000	0.0009	0.0010
	その他					93	0.001		
施設	施設Ａ	54	−0.025	0.0449	0.0396	54	0.098	0.2803	0.1975
	施設Ｂ	54	0.019			55	−0.020		
	施設Ｃ	58	−0.007			58	0.040		
	施設Ｄ	37	0.020			36	−0.182		
		判別的中率 65.0%，相関比 0.3459				判別的中率 65.0%，相関比 0.3323			

３－８　外出行動の実態と規定要因

外出行動に関し，外出目的別に最近１年間の外出頻度と手段を把握した。

外出目的に関わらず，年に数回程度以上の外出がある者は89.9%，月に数回程度以上では76.5%の者が外出しているが，まったく外出しない者も10.1%である。

外出行動を外出目的の別に通院・買い物・その他（散歩，外食，寺社，図書館等）に３区分し，考察を進めることとする。それぞれの外出頻度を比べると，外出頻度が比較的高いのは通院で，50.0%の者が月に数回程度以上，通院している。つぎに頻度が高いのは買い物であり，月に数回程度以上，買い物に出かける者は40.9%である。その他の外出頻度は低く，月に数回程度以上外出する者は25%である(図3-5)。

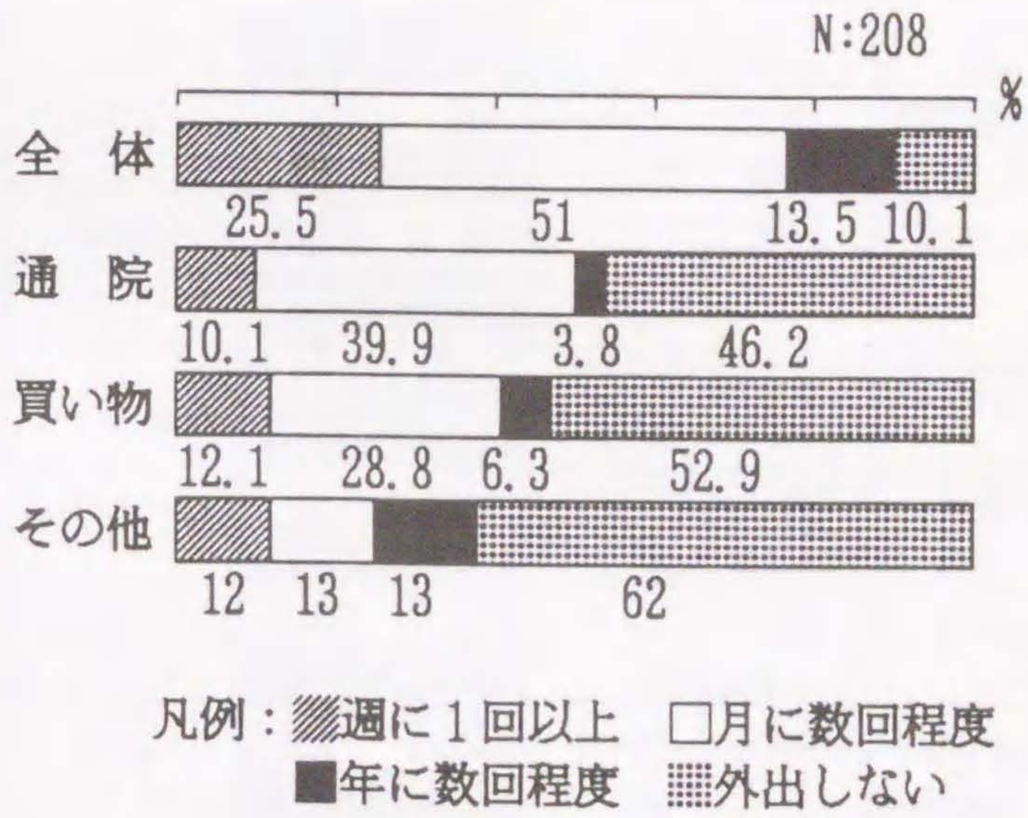


図3-5　外出目的別の外出頻度

３区分した外出目的にＩＡＤＬ，本人前住地等がどの程度関わるかについて分析を行い，検定結果について有意差がみられた項目のみを図示した（図3-6）。精神状態の項目でみると，買い物の有無に有意差がみられる。本人前住地の項目では，通院と買い物の有無に有意差がみられ，同一市町村からの入所者とそれより遠方より入所した者との間で差がみられる。施設外友人の項目では，買い物とその他に有意差がみられ，特に，その他の外出行動において，施設外に友人のいる者の52.1%にその他の外出があるのに対し，施設外に友人のいない者では30.4%であり，その差は22ポイントと大きい。主観的健康感の項目では通院に有意差がみられ，健康状態をよくないと感じている者ほど通院頻度が高いものとなっており，既往研究の知見[5]と同様に通院の有無と主観的健康観には関連がみられる。ＩＡＤＬの項目でみると，すべての外出行動に有意差がみられ，高レベル群の方が外出のある割合が高い。施設の項目では，３区分した外出目的すべてに有意差がみられる。

つぎに，これらの要因がどのような水準で外出頻度に関わるかについて，数量化Ｉ類およびⅡ類による分析を行うこととする。外出行動の全体については外出頻度を目的変数とした数量化Ｉ類による分析を行い，外出目的別には外出の有無を目的変数とした数量化Ⅱ

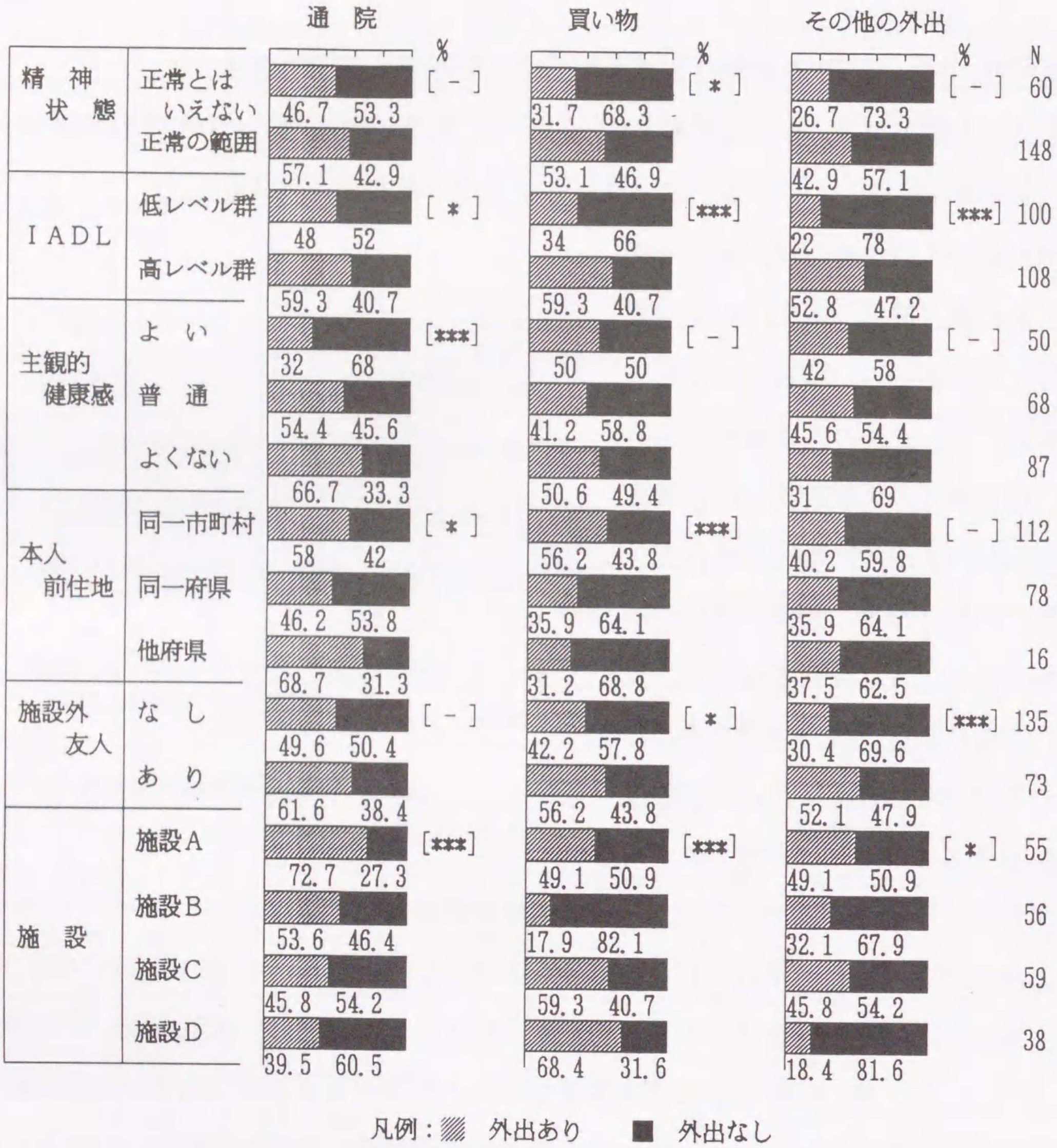


図3-6　身体状況等からみた外出の有無

類による分析を試みた。説明変数は性別，入所期間，ＩＡＤＬ，主観的健康感，本人前住地，施設外友人の有無および施設の７項目を設定した。分析結果を表3-7に示す。

レンジ，偏相関係数ともに数値が大きいほど頻度が高いことを示している。外出行動全体では，レンジ，偏相関係数で順位は多少異なるが第一にＩＡＤＬ，ついで本人前住地，施設の順に外出頻度を規定する要因であることが理解できる。外出目的別にみると，通院ではレンジ，偏相関係数ともに主観的健康感，施設，ＩＡＤＬが外出の有無を規定する要因である。買い物の有無では施設，ＩＡＤＬ，入所期間が，その他の外出行動ではレンジ，

表3-7　外出頻度の数量化理論による計算結果

カテゴリー		通院 N	通院 カテゴリースコア	通院 レンジ	通院 偏相関係数	買い物 N	買い物 カテゴリースコア	買い物 レンジ	買い物 偏相関係数
性別	男性	43	−0.056	0.0715	0.0628	43	−0.131	0.1663	0.1547
	女性	159	0.015			159	0.035		
入所期間	1年未満	30	−0.048	0.0633	0.0449	30	−0.136	0.3011	0.2152
	1～5年	82	0.006			82	−0.048		
	5～10年	35	0.003			35	0.165		
	10年以上	55	0.016			55	0.040		
IADL	高レベル群	108	0.085	0.1831	0.1851	108	0.147	0.3154	0.3271
	低レベル群	94	−0.098			94	−0.169		
主観的健康感	よい	49	−0.283	0.4315	0.3428	49	0.046	0.0999	0.0939
	普通	67	0.017			67	−0.054		
	よくない	86	0.148			86	0.016		
本人前住地	同一市町村	110	0.068	0.1490	0.1612	110	0.054	0.1178	0.1247
	その他	92	−0.081			92	−0.064		
施設内の友人	なし	88	−0.000	0.0005	0.0005	88	0.032	0.0563	0.0626
	あり	114	0.000			114	−0.025		
施設外の友人	なし	129	−0.008	0.0235	0.0237	129	−0.048	0.1315	0.1406
	あり	73	0.015			73	0.084		
施設	施設A	54	0.184	0.3887	0.2848	54	−0.033	0.5356	0.3686
	施設B	54	0.043			54	−0.253		
	施設C	58	−0.085			58	0.091		
	施設D	36	−0.204			36	0.283		
		判別的中率 69.3%，相関比 0.4592				判別的中率 74.8%，相関比 0.5434			

カテゴリー		その他 N	その他 カテゴリースコア	その他 レンジ	その他 偏相関係数	外出行動全体の頻度 N	外出行動全体の頻度 カテゴリースコア	外出行動全体の頻度 レンジ	外出行動全体の頻度 偏相関係数
性別	男性	43	0.027	0.0338	0.0303	43	−0.095	0.1212	0.0820
	女性	159	−0.007			159	0.026		
入所期間	1年未満	30	−0.075	0.1696	0.1543	30	−0.047	0.1021	0.0761
	1～5年	82	0.048			82	−0.040		
	5～10年	35	−0.121			35	0.055		
	10年以上	55	0.046			55	0.051		
IADL	高レベル群	108	0.123	0.2632	0.2639	108	0.261	0.5618	0.3955
	低レベル群	94	−0.141			94	−0.300		
主観的健康感	よい	49	−0.039	0.1325	0.1349	49	−0.224	0.3185	0.2047
	普通	67	0.087			67	0.094		
	よくない	86	−0.045			86	0.054		
本人前住地	同一市町村	110	0.015	0.0325	0.0347	110	0.141	0.3090	0.2208
	その他	92	−0.018			92	−0.168		
施設内の友人	なし	88	0.006	0.0115	0.0121	88	0.007	0.0129	0.0101
	あり	114	−0.005			114	−0.006		
施設外の友人	なし	129	−0.035	0.0969	0.0975	129	−0.052	0.1448	0.1098
	あり	73	0.062			73	0.092		
施設	施設A	54	0.107	0.2630	0.1957	54	0.155	0.3621	0.2023
	施設B	54	−0.053			54	−0.207		
	施設C	58	0.047			58	0.060		
	施設D	36	−0.156			36	−0.019		
		判別的中率 67.8%，相関比 0.4201				重相関係数 0.2855			

〈注記〉　本人前住地欄のその他とは，同一府県および他府県の者を合計して表示した。

偏相関係数で順位は異なるがＩＡＤＬ，施設，入所期間がそれぞれの外出の有無を規定する要因であることが判明した。外出目的別には外出の有無を規定する要因は異なるが，ＩＡＤＬ，施設の項目はすべての外出目的および外出行動全体に関わる要因である。カテゴリースコアは数値が高いほど外出率が高いことを示しており，ＩＡＤＬ高レベル群では外出行動全体，外出目的別にみても低レベル群より外出率は高い。各施設のカテゴリースコアをみると，買い物では，施設Ｄ，施設Ｃ，施設Ａ，施設Ｂの順，その他の外出行動では，施設Ａ，施設Ｃ，施設Ｂ，施設Ｄの順に外出率は高く，外出目的別に施設の順位は異なっている。

ここで各施設のカテゴリースコア（表3-7）と，各施設からの公共交通機関へのアクセスおよび周辺の商業施設との関連について考察すると（表3-8），買い物では，施設の徒歩圏内に大型商業施設が立地する施設Ｃ・施設Ｄでカテゴリースコアは高い数値を示し，徒歩圏内に商業施設がない施設Ｂではもっとも低い数値を示している。その他の外出行動では，市部に立地する施設Ａ・施設Ｃの数値が高いものとなっている。

表3-8　施設からの交通機関へのアクセス・周辺商業施設

	施設Ａ	施設Ｂ	施設Ｃ	施設Ｄ
所在地の人口	約 23.4万（市部）	約 1.2万（郡部）	約147.9万（市部）	約 1.3万（郡部）
交通機関へのアクセス	バス停まで徒歩５分，ＪＲ駅へはバスで５分程度	バス停まで徒歩５分，ＪＲ駅へはバスで20分程度	バス停まで徒歩10分，私鉄・ＪＲ駅へは徒歩10分程度	バス停まで徒歩30分，ＪＲ駅へは徒歩で30分程度
周辺の商業施設	徒歩圏内に商店，JR駅前は商店街やスーパー	徒歩圏内にはなし	徒歩圏内に大型商店街	徒歩圏内に大型のスーパー

〈注記〉 施設Ａのバス便は５～10分毎に１本。施設Ｂのバス便は通勤時間帯に限られ，昼間の利用はできない。

つぎに，施設の立地条件と入所者の外出行動がどのように関わるのかをみるために，ＩＡＤＬおよび施設を分析視角とし，外出手段の側面から考察を行う（図3-7）。

入所者の外出手段をＩＡＤＬ高レベル群でみると，市部に立地する施設Ａではバス利用36.7%，電車利用40%であり，同じく市部に立地する施設Ｃはバス利用40.6%，電車利用21.9%と，入所者の外出行動は公共交通機関を利用した行動圏域に拡がっている。それに対し，郡部に立地する施設Ｂおよび施設Ｄでは，バス利用・電車利用はそれぞれ26.7%・23.3%，18.8%・18.8%であり，タクシーのみの利用はそれぞれ46.7%，31.3%ともっとも多く，施設からの交通アクセスが入所者の外出手段に影響しているものと考えられる。

ＩＡＤＬ低レベル群でみると，電車利用があるのは市部に立地する施設Ｃのみであるが，

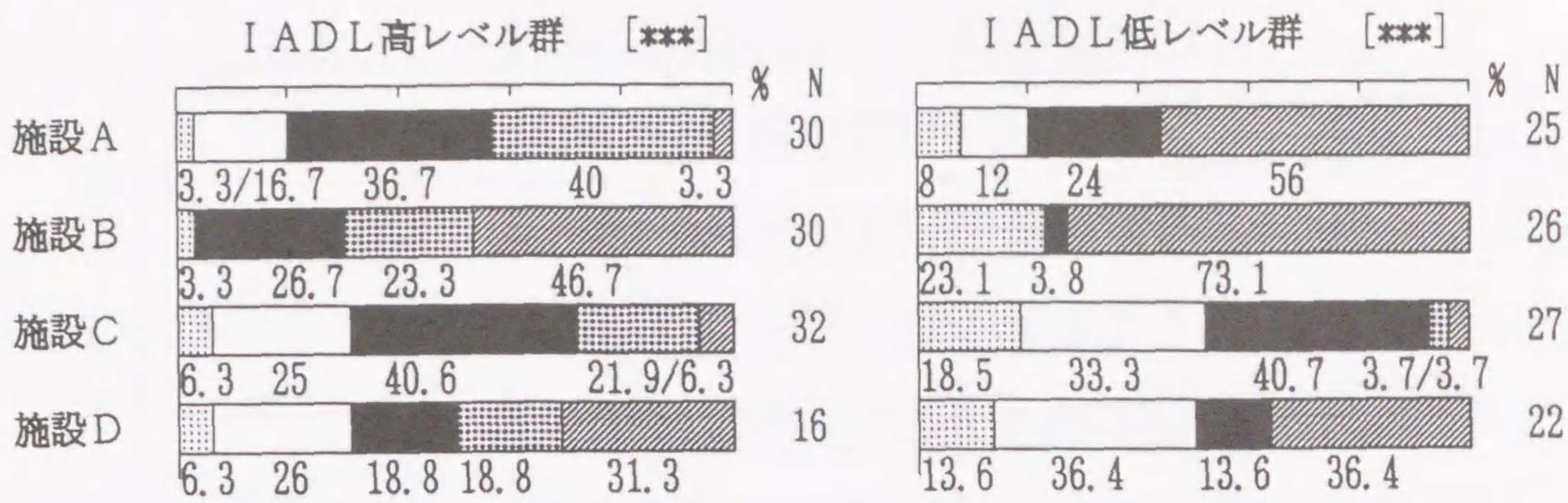


図3-7　ＩＡＤＬのレベル別にみた各施設の外出手段

その割合は 3.7%に過ぎない。各施設毎のバス利用の状況は 3.8%～40.7%に分布し，市部に立地する施設Ｃは40.7%と突出して高い。施設Ｃは，ＩＡＤＬのレベルを問わずバス利用の者の割合が40%を超えており，交通アクセスに恵まれた施設の立地条件に加え，施設Ｃの所在する行政区での老人無料パス制度もバス利用を促進しているものと考えられる。外出手段が徒歩のみによる外出行動に関し，徒歩圏内に商業施設のある施設Ａ・施設Ｃ・施設Ｄは12.0%～36.4%に分布するのに対し，徒歩圏内に商業施設のない施設Ｂでは徒歩のみによる外出は皆無である。この施設Ｂは，タクシーのみの利用が73.1%と他施設に比して突出して高く，最寄りバス停への距離は比較的近いものの，昼間にバス便がないことの影響が現れているものといえる。

３－９　内外交流と外出行動からの入所者の類型化

これまで施設内交流，施設外交流および外出行動の別に考察を進めてきたが，施設内外交流と外出行動を総合的に捉え入所者の特性をみることとする。施設内交流を測る指標として用いた３項目（①行事参加の程度，②参加クラブの数，③施設内の友人の有無とつきあいの程度），施設外交流を測る指標として用いた２項目（①施設外サークルへの参加，②施設外友人の有無とつきあいの程度），および外出行動の指標では外出頻度を用い，因子分析（主因子解法，バリマックス回転）を行った。試析の結果，因子数を３とした時に最適解を得られた（表3-9）。

つぎに，抽出された第１因子から第３因子の因子得点をもとにクラスター分析を行った

表3-9　因子分析結果

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
施設内の友人の有無とつきあいの程度	.9303	.0464	.0937
施設外サークルへの参加	−.1376	.7926	.1614
外出頻度	.2688	.6949	.0267
施設外友人の有無とつきあいの程度	.2888	.6227	.2633
参加クラブの数	.0119	.1137	.8944
行事参加の程度	.3809	.1468	.6756
固有値	2.2491	0.9940	0.8389
寄与率／因子別	37.5%	16.6%	14.0%
累積	37.5%	54.1%	68.0%

〈注記〉　外出頻度は通院および施設の行う外出行事を除いた。

結果，施設内外の交流の程度により，入所者を次の４タイプに分類することができる。具体的には，[内－外－][内＋外＋][内＋外－][内－外＋]と表現することとする（内は施設内，外は施設外交流を表し，＋は交流が高く，－は交流が低いことを示す）。それぞれの特性は，以下のように説明できる（図3-8）。

タイプⅠ[内－外－]（89人・44.5%）

このタイプがもっとも高い割合を示し，特に男性では，56.8%と過半数を超える。また，85才以上の年齢層および入所期間10年以上の入所者，ＩＡＤＬ低レベル群の過半数がこのタイプである。

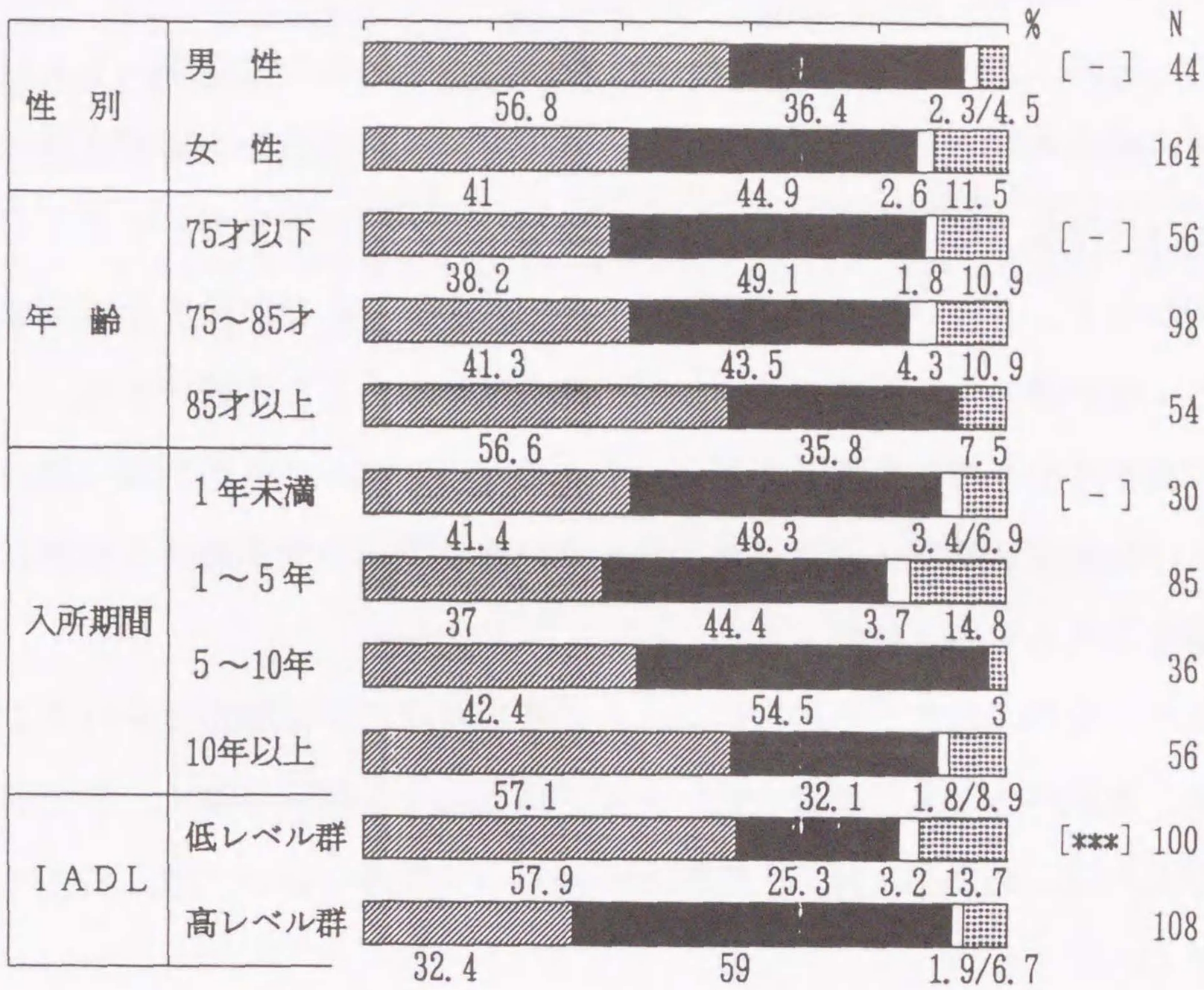
タイプⅡ[内＋外＋]（86人・43.0%）

女性ではこのタイプが44.9%ともっとも多い。またＩＡＤＬ高レベル群では59%と過半数を超える。

タイプⅢ[内＋外－]（20人・10.0%）

タイプⅣ[内－外＋]（ 5人・ 2.5%）

上記のタイプⅢ，タイプⅣともに少数である。軽費入所者を対象とした同様の類型化では，性，年齢，入所期間，ＡＤＬ等との間に有意差がみられたが，養護入所者の場合は，入所者類型に関しての有意差がみられるのはＩＡＤＬのみである。



凡例：▨内－外－　■内＋外＋　□内－外＋　▦内＋外－

図3-8　内外交流による入所者類型の特性

３－１０　まとめ

本章は養護入所者を対象とし，入所者の施設内外の交流や外出行動がどのような要因に規定されるかを明らかにすることを目的としている。その結果を以下に要約する。

(1) 施設内外の交流，外出行動に関し，ＩＡＤＬ高レベル群の活動は低レベル群に比して活発であり，ＩＡＤＬのレベルは，入所者の施設内外にわたる交流の程度を規定する第一義的な要因である。

(2) 施設外のサークルへの参加者は少数であるが，性別では女性の参加が多い。また，市部に立地する施設の方が参加者は多く，前住地が施設と近接する者の参加者が多いことに特徴がある。施設外の友人の有無およびつきあいの程度に関し，男性は女性に比べその程度は希薄であり，また，入所期間の長期化により友人とのつきあいが希薄になる傾向がみられる。

(3) 外出行動の中心的な内容は通院・買い物である。外出目的別に外出の有無を規定する

要因を析出した結果，外出目的より規定要因が異なることが判明した。通院では，主観的健康感，施設，ＩＡＤＬが外出の有無を規定し，買い物では施設，ＩＡＤＬ，入所期間が，その他の外出ではＩＡＤＬ，施設，入所者期間が外出の有無を規定している。外出行動全体の頻度では，ＩＡＤＬ，本人前住地，施設が外出頻度を規定している。外出目的に関わらず，ＩＡＤＬおよび施設は，外出の有無ならびに頻度を規定する上位の要因である。徒歩圏の生活環境が外出行動に深く関わることを指摘できる。

(4) 外出行動を外出手段から捉えた場合，ＩＡＤＬのレベルは外出手段に関わると同時に，施設からの公共交通機関へのアクセスならびに施設周辺の商業施設の有無などの立地条件が影響を与えるものと理解できる。

(5) 施設内外の交流の程度と外出行動から入所者を４タイプに類型化を行うことができた。その結果，施設内外ともに交流の低いタイプがもっとも割合が高く，中でも85才以上の年齢層やＩＡＤＬ低レベル群，入所期間が長期の入所者においては，このタイプが過半数を超えている。

【注および引用文献】

1) 児玉桂子：老人居住施設環境評定尺度の尺度化とその有効性に関する研究，日本建築学会計画系論文集，N0.366，1986年，P53-60

2) 児玉桂子：高齢者居住施設の建築条件と居住者の環境適応に関する研究・建築条件に対する居住者のクレームの分析，日本建築学会計画系論文集，N0.385，1988年，P53-63

3) 児玉桂子：高齢者居住施設の建築条件と居住者の環境適応に関する研究・居住者のモラールと心理的苦痛に及ぼす建築条件の影響，日本建築学会計画系論文集，N0.390，1988年，P77-85

4) 小島隆一，山崎俊裕，田中誓子，南部祐泰：都市居住高齢者の日常生活機能と行動に関する研究（その２），横浜市養護老人ホーム入所者の日常生活機能と行動調査，日本建築学会学術講演梗概集，1997年，P81-82

5) 高橋徹，小滝一正，林玉子，児玉桂子：歩行障害老人の屋外における行動特性の研究・歩行障害老人の外出特性とその要因，日本建築学会学術講演梗概集，1981年，P1255-1256

6) 養護の居室については，「養護老人ホーム及び特別養護老人ホームの設備及び運営に関する基準」（厚生省令）において，「一の居室に入所させる人員は，原則として２人以下とする。」と定められている。今回の調査対象施設において，個室は3施設・計9個室であり，他はすべて２人部屋である。

7) 身元引受人とは，入所に際しての保証人，あるいは施設が何らかの連絡をとる際の第一連絡者と位置づけた。

8) 古谷野亘，柴田博，中里克治，芳賀博，須山靖男：地域老人における活動能力の測定，老研式活動能力指標の開発，日本公衆衛生誌，第34巻第3号，1987年，P109-114

9) 手段的自立の４項目とは，「バスや電車を使って１人で外出できますか」「日用品の買い物ができますか」「請求書の支払いができますか」「銀行預金・郵便貯金の出し入れが自分でできますか」の４項目である。なお，手段的自立に関する項目は老研式活動能力指標では５項目で構成され，「自分で食事の用意ができますか」の項目が含まれるが，養護は配食制であるため，今回の調査ではこの項目を除いて調査を行った。